くま神の娘　　アイヌ

わたしは、ゆぺっ川の中ほどに住んでいる女です。夫は狩りのじょうずな人で、いつもたくさんの鹿をとり、たくさんのくまをとるので、何不自由なく暮らしていました。たったひとつもの足りないのは、子どもが生まれないことでした。

子どもが欲しい欲しいと思いながら暮らしていたある日のこと、どこから来たのか、黒い雌（めす）の子犬が、家に住みつくようになりました。わたしたちはその迷い犬を、人間の子どものように大切に育てました。ものを食べさせるときも、漆塗（うるしぬ）りのお鉢（はち）をきれいに洗って食べさせました。りこうな犬で、やがて、夫が狩りに出るときは、一緒に行くようになりました。

ここからは犬が語ります。

わたしはどこで生まれたのか、父も母も知らず、気づいたときには、心の優しいアイヌの夫婦に養われていました。アイヌである父が狩りに山へ入るときは一緒に行って、狩りの様子を見ているうちに、狩りのしかたを覚えました。

わたしは、山の中を走りまわって鹿を見つけると、追い回してかみつきます。鹿が倒れたところに父が駆けつけ、よろこんで、私の頭をなでてくれます。

「おまえはなんとりこうな犬だろう。神さまが、子どものいないわたしたちをかわいそうに思って、おまえを授けてくれたのかも知れない。いつまでも、わたしの子どもとして手助けしておくれ」

わたしはしっぽをちぎれるほどふって、父の言葉に応えました。

毎日毎日わたしがたくさんの鹿をつかまえるので、父は、皮剥（かわは）ぎだけを仕事にし、何を欲しいとも何を食べたいとも思わずに暮らしていました。

食べ物がたくさんある我が家に、ある日、どこからともなく大きい犬が二、三匹やって来て、住みつくようになりました。

父や母は、大きい犬たちにも食べ物をどっさりやったので、犬たちは、おおかみをまるまる太らせたように大きくなりました。けれども、狩りに行ってもわたしほど速く走ることができず、ずっと後から、はあはあいいながら長い舌を出して走ってきました。

そして、わたしがつかまえた鹿のそばにすわり、さもさも、

「おれたちも手伝ったんだよ」という顔つきで、父の来るのを待ちます。わたしは、かわいそうに思って、「そうだ。そうだ」という顔をして一緒に父を待ち、同じように頭をなでてもらっていました。

ところが、初めのうち遠慮がちにしていた大きい犬たちは、だんだん横着になってきました。わたしが鹿を倒し、鹿のそばで父を待っていると、太って大きい犬たちは、後からはあはあ息を切らせて走ってきて、いきなりわたしの首すじをくわえて、ぽーんを投げ飛ばすのです。体の小さいわたしは、あっというまに飛ばされて、大地にたたきつけられます。ようやく立ち上がって鹿に近づこうとすると、また投げ飛ばされ、鹿のそばに座って父を待つことができません。

やがて父が来て、大きい犬たちだけが頭をなでてもらい、わたしは父ににらまれるようになりました。そればかりか、家でも、大きい犬たちにえさを横取りされ、ろくに食べ物を口にできなくなりました。それでもわたしは、狩りに行くと、ほかの犬たちより先に走って獲物を倒します。すると、後から来た大きい犬たちにまたまた獲物を横取りされるのです。そんなことを知らない父は、わたしをにらむだけでなく、棒を持って、「このなまけもの」といいながら、わたしをめちゃくちゃ殴るようになりました。わたしは、きゃんきゃんと鳴きながら逃げまどうばかりです。えさを十分に食べることもできず、狩りの獲物も横取りされ、父には殴られ、わたしはだんだん弱っていきました。

とうとうわたしは鹿をとることができなくなり、

（このままこの家にいては飢え死にしてしまうばかりだ）と思いました。

ある秋の日のこと、わたしは家を出ることにしました。わたしは、ふらふらしながら、山道をずうっとずうっと歩いて、山奥に入っていきました。沢を登りつめて高い峰を越え、また別の沢を下り、崖をはい上がりました。崖はどんどん高くなり、とうとう進むこともどることもできなくなってしまいました。するとむかいの崖との間が狭くなっているところがありました。うまく飛び越せるかも知れません。けれども、ろくにものを食べていないので、力が入りません。

（もし向こう側に渡れないで落ちたらどうしよう）と思いましたが、ほかに渡れそうな場所はありませんでした。

（どうせここで飢え死にするのなら、この崖を飛び越せずに落ちて死んでも同じこと）と思いきり、勢いをつけてえいっとばかりに跳びました。ところが、前足だけが崖っぷ

ちに引っかかり、からだが宙ぶらりんになってしまったのです。
（ここで落ちては命がない。どうしよう。あわててはいけない）と、後ろ足でそうっと探ってみると、細い木の枝に触れました。その木の枝でからだを支えて、静かに前足に力を入れ、じわじわと体を上げて、ようやく崖の上にはい上がりました。
（ああ助かった）と思うと、急に力が抜け、その場に倒れてしまいました。崖の幅は、わたしの体の長さの十倍もあったのです。日が暮れかかり、わたしは少し歩いて、ならの木の根もとの落ち葉の上に丸くなって眠ることにしました。
目を覚ますと、すっかり夜が明けていて、夜のうちに雪が降ったらしく、わたしの上にも雪が積もり、あたりは白くなっていました。わたしは動く気力もなく、
（このまま死んでもいい）と思いながら、うとうとしていました。
ふと気配を感じてうっすら目をあけると、ならの木の近くを若者がひとり、狩りの身支度で、山のほうへ歩いていくのが見えました。若者は、わたしをちらと見て、そのまま行ってしまいました。
日が高くのぼり、体に積もった雪も解けて暖かくなった頃、若者が、鹿を一頭背負って帰ってきました。わたしは、
（人間のいるところへ行かなければ死んでしまう）と考え、よろよろと立ち上がりました。そして、体をぶるんとひとつ大きくふるうと、残っている最後の力をふりしぼって若者の後について行きました。若者はときどき立ち止まって、わたしを待ちながら沢を下りていきます。しばらくすると、かなり大きい狩り用の小屋が見えました。若者は、この小屋に泊まって、ひとりで狩りをしていたのです。
若者は小屋に着くと、水をくんだり薪を集めたり、いそがしく動きまわって、夕食の支度をととのえました。わたしはそれを見ながら、家の外の物干し竿のところで体を丸めて寝ていました。食事の用意ができると、若者は、わたしをひょいと抱えて家の中に入れました。そして、漆塗りのお鉢においしい食べ物をたくさん盛って、左座にいるわたしの前に置き、
「どこから、どんな訳でここに来たのか、アイヌであるわたしには分からないけれど、かなりお腹がすいている様子、どうぞこれを食べてください」といいました。
わたしは涙が出るほど嬉しく、静かに尾をふって応え、ゆっくり食べはじめました。
それからは、若者は、狩りにも行かず、何日も何日もわたしの面倒を見てくれました。

おかげでわたしはすっかり元気を取りもどすことができました。

ある日、若者が狩りに出かけた後のことです。わたしが狩り小屋の近くを歩いていると、山のほうから人声がしました。立木（たちき）の陰にそっと隠れて見ていると、ふたり連れの女がやって来ました。

ひとりは、黒い着物を重ね着し、ひとりは白い着物を着ています。白い着物の女は、ござを編む道具と針仕事の道具を小脇（こわき）に抱えていました。

ふたりは、何か話をして笑いながら歩いてくると、わたしが隠れている立木の前で急に立ち止まりました。そして黒い着物の女が、

「おまえがそこにいることを知っているよ。出ておいで」といいました。

わたしは、どうして隠れていることを知っていたのかふしぎに思いながら、ふたりの女と一緒に狩り小屋にもどりました。

女たちはさっさと上座に座ると、黒い着物の女がいいました。

「おまえはただの犬ではなく、くま神の娘で、わたしの妹です。わたしたちの父、くま神は、おまえを犬の姿に変え、父がいつもお客になって行っていた精神のよいアイヌに授けました。父はおまえをそのうち人間にしようと思っていたのだけれど、すっかり忘れてしまい、こんなに長い年月がたってしまいました。気がつくと、おまえは犬の姿のまま死ぬほどの苦労をした末に、この狩り小屋の若者に助けられていることが分かりました。さあ、妹よ。これからおまえを人間にするから、この狩り小屋の若者と結婚しなさい。ここにいる白い着物を着ている人はオキクルミカムイの妹で、おまえが人間になってから必要なことを教えるために、一緒にここまで来てもらいました」

黒い着物の女は、わたしをつかまえると、手の中にくるくると丸めて、ふっと息を吹きかけました。そのとたん、わたしは美しい人間の娘に生まれ変わっていました。

黒い着物の女は、背負ってきた着物をわたしに着せました。白い着物の女は、小脇に抱えてきた道具で、ござの編み方や針仕事や、刺繍（ししゅう）のしかたを教えてくれました。そして、仕事を教えながら、口ではいろいろな話、アイヌの女がしなければならないことを、たくさん聞かせてくれました。

夕方近くになると、ふたりの女はさっさと神の国に帰っていきました。

わたしは、ひとり残され、火を焚（た）いたり水をくんだりして、若者の帰りを待っていました。

ここからは、男が語ります。

わたしはひとりの若者でした。ある秋のこと、わたしは、ずうっと遠い狩り小屋に行って、泊まりがけで狩りをしていました。

ある朝のこと、いつものように狩りの支度をして山へ行くと、細道のかたわらの太いならの木の下に、一匹の犬が寝ていました。体の上にわずかに雪が積もっているところを見ると、昨日の夜から寝ていたことが分かります。私が通るのをじっと見て、目だけを動かしているのを見れば、死んでいないことが分かりました。それを横目で見ながら山へ行き、鹿を一頭とってもどってくると、犬はまだ寝たままでいました。わたしがさっさと通り過ぎると、犬は、あわてて起きあがってついてきました。立ち止まってふり向くと、犬は、静かに身を伏せ、前足の上に鼻をのせました。それで、りこうな犬だと分かりました。わたしは、弱っている犬が遅れると、立ち止まって待ちながら、狩り小屋まで一緒にもどりました。

夕食の支度をし、犬を家の中に入れるために抱きかかえてみて驚きました。何十日もものを食べていないらしく、骨と皮ばかりにやせ細っているのです。わたしは、漆塗りのお鉢をきれいに洗って、肉の煮たのや、おいしい食べ物をいっぱい入れてやりました。犬は、初めはなめていただけでしたが、だんだん食欲が出て、少しずつ元気になっていきました。わたしはしばらくのあいだ山へも行かず、めんどうを見てやり、犬はすっかり元気になりました。

ある日、わたしは山へ狩りに行きました。鹿をとって帰ってくると、人のいるはずのない狩り小屋から、食べ物を煮る煙が上がっていました。変なことがあるものだと思って、そっと窓からのぞくと、いつも犬が座っている左座に、美しい娘が座っていました。娘は長い髪を床に垂らし、上品に座っています。

わたしはあわて、家の外で狩りの身支度をといて、遠慮しながら家の中に入りました。そして、娘に向かって、丁寧にオンカミ（礼拝）して、

「これはいったいどうしたことですか」とききました。

娘は泣きながら、今までのことをすっかり話してくれました。わたしは、神の娘をお嫁さんにできることを知って、何度も何度もオンカミを重ねました。そして、

「明日は、家に帰って父と母にこのことを聞かせて、村の人たちにも祝ってもらおう」

といいました。

つぎの朝、夜が明けると、わたしは娘を連れて家に帰りました。父も母も村人たちも、心から喜んでくれて、たくさんのお酒を醸(かも)し、盛大な結婚式をしてくれました。

わたしと妻は、犬だった妻を最初に育ててくれた父と母のところに行くことにしました。妻の記憶をたよりに、山を越えて川を渡り、ようやく妻の育った家にたどりつきました。家は、遠くから来たつる草や近くから来たつる草がからみ合って、屋根も分からないほどになっていました。妻はその家に飛びこみ、

「おとうさん、おかあさん、今帰りました」と、泣きながらいいました。すると、ふたりの年寄りが、着物のそでの穴(あな)から目だけを出して、

「わしらに子どもはいない。父、母、と呼んでくれる人がいるはずがない」といいました。妻は、

「わたしは、むかし、かわいがってもらっていた犬です」といいました。

年寄り夫婦は、後ろに手をつくほどびっくりして座りました。見ると、ふたりは死に装束(しょうぞく)を身にまとっています。そして、

「犬であったおまえがうちにいてくれたときはあれほどたくさんとれた鹿も、大きい犬たちには一頭もとれなかった。その犬たちも食べるものがなくなり、みないなくなってしまった。わたしたちもこんなに年をとったので、今は死ぬのを待つばかりだ」といいました。

妻は、ふたりの死に装束をはぎ取って普通の着物を着せました。それから、三人は、手を取り合って喜びあいました。父親は、

「あれほど働いてくれたおまえを、殴ったりして悪かった」と、わたしの妻に、泣いてあやまりました。

わたしたちは、そうじするやら、つる草を切り落とすやらして、人が住む家らしくしました。そして、わたしは、その家から、何日も何日も狩りに行き、たくさんの干し肉を作って、年寄りたちに与えました。それから、わたしたちは、

「これからは何度も来ますよ」といって、村に帰りました。

それからは、一年のうち半分は、わたしの父母のところで暮らし、残りの半分は、妻を育ててくれた年寄り夫婦のところで暮らしました。

「そんなわけで、わたしの妻は、元もと人間だったのではなく、くま神が自分の子ども

を犬に変えて、精神のよい人間に授け、あとで人間にされた女です。老人たちは次々に世を去り、わたしたち夫婦の間にはたくさんの子どもが生まれ、今は何を欲しいとも、何を食べたいとも思わないで暮らしているのです」

と、ひとりのアイヌが語りました。

村上郁再話

資料『アイヌの昔話ーひとつぶのサッチポロ』萱野茂／平凡社